

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



画力とサラリーマン経験。
自らの強みを最大限に生かす

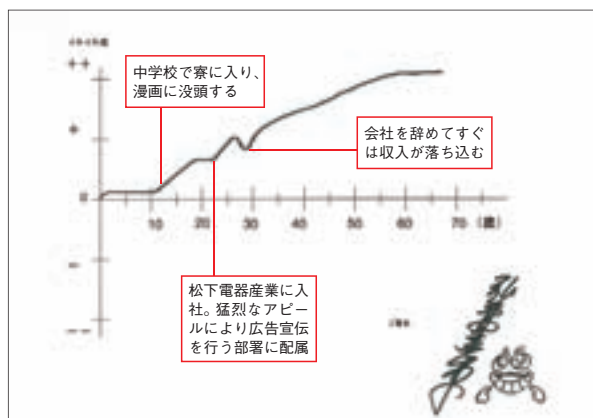
弘兼憲史氏 Hirokane Kenshi

漫画家

Career History

弘兼憲史氏の キャリアストーリー

1947年	0歳	山口県生まれ。幼稚園時代から絵を習っていた。小学校高学年のときに手塚治虫の影響を受け、漫画家という職業に憧れを持つ
1966年	18歳	早稲田大学法学部に進学。漫画研究会に入る
1970年	22歳	松下電器産業（現パナソニック）に入社。本社販売助成部に勤務する
1973年	25歳	松下電器産業を退職。翌年、『風薫る』（小学館）で漫画家デビュー
1983年	35歳	『課長 島耕作』の連載を開始
1984年	36歳	矢島正雄原作『人間交差点』（1980年連載開始）で第30回小学館漫画賞を受賞
1991年	43歳	『課長 島耕作』で第15回講談社漫画賞を受賞
2000年	52歳	中高年の恋愛を描いた『黄昏流星群』（1995年連載開始）で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。2003年には同作で日本漫画家協会賞大賞を受賞
2007年	60歳	紫綬褒章を受章
2014年	67歳	デビュー40周年を迎え、『会長 島耕作』『黄昏流星群』などを連載中。エッセイ執筆、ラジオ出演など多方面で活躍している



直筆の人生グラフ。絵で存在感を発揮しはじめた中学時代から上昇。会社退職後の収入減で一時期下がるが、その後は順調にイキイキ度が上がっている。

サラリーマンの人生をリアルに描く『島耕作』シリーズでおなじみの漫画家・弘兼憲史氏。1983年に『課長 島耕作』で始まった同シリーズは、現在『会長 島耕作』として連載中。中高年の恋愛を描いた『黄昏流星群』も2015年で連載20周年を迎える。競争の激しい漫画家の世界で、40年間にわたって第一線で活躍し続けてきた弘兼氏のキャリアをたどる。

特技を生かせる仕事をするために ときには猛烈にアピールした

幼いころから絵が上手で、才能を見抜いた母親が探してきた絵画教室に幼稚園時代から通った。デッサンから水彩、油絵、版画まで本格的な絵の技術を学んだという。漫画家を夢見るようになったのは、小学生時代。小学校4年生の夏休みは1カ月間家にこもって手塚治虫氏の作品『地球大戦』を模写し、漫画の描き方の基礎を覚えた。

「ところが、中学生くらいになると、現実を知りましてね。漫画家というのは頑張って資格を取ればなれるという職業ではない。だから、夢は夢として、まずは大学に進んでから将来を考えようと早稲田大学に入りました」

在学中は漫画研究会に所属していたが、出版社のアルバイトで漫画家の過酷な生活を垣間見たこともあり、自分がプロになれるとは思えなかった。

「ただ、絵は自分の最大の特技だという自覚があったので、その特技を生かせる仕事に就きたいと考えました。それで、企業で宣伝の仕事をする道を目指したんです」

当時「宣伝御三家」と呼ばれていたサントリー、松下電器産業、資生堂の採用試験を受け、最初に採用通知があった松下電器に入社。だが、宣伝の仕事に配属される保証はなかった。

「同期は理系の研究職をのぞいても約450人。そのうち、宣伝関連の部署に配属される新入社員は1人か2人です。かなりの難関でしたが、どうしても宣伝の仕事がやりたくて、6カ月の新人研修中に猛烈にアピールしました」

座学の研修では、会社の歴史や組織構成などを積極的に学び、毎日提出するレポートには自らの宣伝の仕事への思いを織り交ぜてびっしりと書いた。小売店での販売実習では、プライスカードや店頭ポスターなど手づくりの販促物を店長に提案。提案が通ったらそれを自ら作成し、巡回指導の先輩社員に名前を覚えてもらった。

懸命なアピールが功を奏し、研修後は見事宣伝関連の

部署に配属。ショールームのショップデザイン、POPやカレンダーなど販促物の制作を担当した。

「仕事は面白かったし、毎日が充実していました。それにもかかわらず、漫画家になりたいという夢を思い出してしまったのは、仕事仲間のイラストレーターさんたちの影響を受けたから。イラストの仕事をしながらか漫画家を目指している人が多く、彼らの姿を見るうちに『やりたいことがあるのなら、心のままに挑戦してみればいいんじゃないか』と思うようになったんです」

漫画家デビュー後しばらくは 編集者の指示に従って描いた

入社3年目に松下電器を辞めて漫画家を目指し、翌年に『風薫』でデビュー。順調なスタートを切ることができたが、勝算があったわけではない。

「大学の漫画研究会ではひとコマ漫画しか描いたことがなく、何コマもあるオリジナルの漫画を初めて描いたのは会社を辞めてから。見切り発車もいいところでした」

ただ、生活の不安はなかった。松下電器時代のツテでイラストの仕事を手に入れることができ、会社員時代の3倍の収入があったからだ。

「生活のことを気にせず、漫画を描くことに集中できる環境をいかに作るかということは明確に意識していました。そういうところは意外と慎重なんです(笑)」

デビュー後もしばらくは、イラストの仕事の続けながら、読み切りの作品を描き続ける日々だった。

「今の僕は自分の描きたいものを描いていますが、当時は編集者の指示に従っていました。不本意であっても、まずは最初の読者である編集者が納得するものを選び、掲載してもらうことが大事だと思っていたからです」

長期展望はなく、目の前の 一作を必死で描き続けてきた

出版社が満足する実績を作り、自分の意見を主張できるようになったころに始めた連載が、後にドラマ化もされた『人間交差点』だ。さまざまな人間模様を描いた同作は高く評価され、小学館漫画賞を受賞。弘兼氏の漫画

家としてのキャリアは軌道に乗った。

『課長 島耕作』が誕生したのは、デビュー11年目。「『読み切りの作品を1本書いてくれ』と編集者から言われて描いたのが始まり。サラリーマンを主人公にしたのは、当時は企業経験のある漫画家が少なく、自分の特徴を生かそうと思ったからです。ただ、最初は社内恋愛の話で、主人公のキャラクターはどこにでもいる小心者のサラリーマン。タイトルも原稿では『カラーに口紅』でした。ところが、編集者が『面白いから、シリーズ化しよう』ということで、勝手にタイトルを『係長 島耕作』に変えてしまって(笑)。2話目から『課長 島耕作』になり、スーパーサラリーマンの活躍を描くというコンセプトを後追いで固めていきました」(*)



『島耕作』シリーズは30年続き、主人公も出世。現在は会長に就任して2年目だ。

「『島耕作』は私と同じ年齢に設定し、現実の時の流れとともに年を取っています。『島耕作』が勤務する会社も私が勤務した松下電器と同じ電機メーカー。松下が辿ってきた道に近いものを描き続けてきたので、私自身、漫画家とサラリーマンの2つの人生を歩んできたような感覚があります。政治経済を

リアルタイムで描くには多くの取材が必要ですが、わからないことは企業で頑張っている友人に教えてもらっています。松下時代の同期にもずいぶん助けられました」

「島耕作」は出世欲のない人物だったが、会長までのぼりつめた。その理由を弘兼氏はこう答えてくれた。

「それはやはり、周囲から求められたからです。取材で企業の社長にお話を聞いたときも、『社長抜擢は寝耳に水だった』とおっしゃる方が多かったです」

弘兼氏自身も「目の前の一作を必死で描き続けてきただけ」と自らのキャリアを振り返る。

「ただ、締め切りを守る、人づきあいを大切にするなど仕事相手に嫌われないように心がけてきました。そこは『島耕作』も似ています。どんなに才能がある人も、周囲から求められないと力を発揮できない。キャリアを築くためには、自分の才能を最大限に発揮できる状況を自ら作っていくことが大事だと思います」

(*)のちに『係長 島耕作』は、『課長 島耕作』の若き日を描くコンセプトで連載化された(2010～2013年)。

漫画のなかで別の人生を生きる 島耕作は弘兼氏のバーチャル・キャリア

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

我が家の書棚にも弘兼氏の漫画が所狭しと並んでいる。『人間交差点』『ハロー張りネズミ』『加治隆介の議』『黄昏流星群』、そして膨大な『島耕作』シリーズ。考えてみれば、もう30年も彼の漫画を読んでいることになる。なぜ30年読んでいて飽きないのだろうか？ それは弘兼氏と読者が同じように年を積み重ねていて、漫画も同じように年を重ねているからではないだろうか。

島耕作が勤務している会社は初芝電器産業だが、読者も承知しているとおり、これは弘兼氏が勤務していた松下電器産業がモデルとなっている。社名は松下がパナソニックに変わり、初芝がTECOTに変わっているが、会社の動きも松下の現実をかなり反映させている。

島耕作は弘兼氏と同じ年の設定で、出身も同じ山口県岩国市。大学も早稲田大学だ。もともとは「同じにしておけばわからなくなるので」（弘兼氏）という理由だったが、そこから島耕作のキャリアは、弘兼氏の仮想キャリア（バーチャル・キャリア）のようになっていったのではないだろうか。

出世のスピードは、同年の友人の出世をなぞっているという。また、島耕作の行動や発言も、「自分ならこうするだろう」（弘兼氏）ということに適宜反映させているようだ。

お話をしている感じるのは、弘兼氏がもしもサラリーマンを継続していてもきっと出世しただろうな、ということ。それ以上に適性があった漫画家を選んだため、選ばなかった人生は漫画のな

かで歩んだのだと思う。

彼は、ほかに料理人になるという夢も持っていた。そのキャリアは『黄昏流星群』（第4巻の『星のレストラン』という物語にまともっている。往年の名料理人と若い料理人。そこに、自らは選ばなかった料理人という道を描いたのだろう。

現在の『会長 島耕作』には、『ハロー張りネズミ』の探偵・木暮久作や、『加治隆介の議』の主人公の息子が政治家となって登場している。『島耕作』という漫画のなかに、弘兼氏の、漫画家としてのキャリアまでもが統合されてきているのではないだろうか。

キャリアには複数の選択肢があるが
選べるのは1つだけである

